慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	仏文科の初期
Sub Title	
Author	松原, 秀治(Matsubara, Hideji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1982
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.44, (1982. 12) ,p.356- 358
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	白井浩司教授記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00440001-0356

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

永田清君が教師になるべきだと云い、病気中の戸川秋骨先生の代講として文学部予科で英語を教えた。この相談は井汲さん永田君と銭湯の湯舟の中でしたのだ。高橋広江君が留学したあとを教えたり高等部でラスキンを教えたり藤原工大で教えたり教員となって働らいている中に戦争が激しくなった。学生宛の赤紙が教務課に届くのを渡すため学生を自宅に探し出して渡す辛い仕事もあった。

戦後は大学院も出来、ラテン語、古仏語を受持ち松原君の息子から鷲見君まで教えた。色々なことをやって来たものだ。定年後も京都外国語大学で十年以上教えることが出来た。

白井さん、定年で責任の重荷を降ろし、再び若返って自分の楽しい人生に充実した一歩を踏み出して下さい。

（元本塾大学教授）

仏文科の初期

松原秀治

慶応の文学部に仏文科が何時出来たかと云えば、昭和四九年（一九七四年）発行の仏文科同窓会名簿に、「明治四三年仏文学の講座が開設される。担当者永井壮吉（荷風）」と載っていますから、この年だと見てよいのだと思います。尚同書に「明治三七年仏語が正規科目必修科目となる。担当者田中一貞他」とあるのは、フランス語は明治中ごろになって慶応に始めて正式に取り入れられたと云う事を示すものと思われます。（それまでは英語一本だったのでしょう。）

しかし永井荷風はその後（大正五年）旋（つむじ）を曲げて学校を辞任しているので、慶応の仏文科はここで一度消えたのではないかと思います。勿論教授科目としてのフランス語は失くなったわけではなく、私自身もその前からフランス語の授業を取っていましたが先生は前田長太（越

嶺）氏でした。前田先生については今では御存知ない方もあるかと思いますが、カトリックの神父で、教区長もされた方です。事情があって退かれ、慶応の予科のフランス語と本科のラテン語の教職についていられました。仏印で受けられた神父の試験では抜群の成績を示され、神学は勿論、哲学にも造詣深い学者でした。

永井荷風氏の後任は前掲書には太宰施門と出ていますが、仏文学の講義は行われなかったのではなかったかと思います。それが段々と仏文学科らしくなって行ったのは大正九年の大学令発令以後です。前掲書の昭和三年の頃に「仏蘭西文学科が独立。」とあります。私は大正十五年に仏文科に這入っているので、その時どう云う変化があったかを覚えていますが、つまり先生に移動があり、授業もそれによって変化があってフランス文学科と云うのにふさわしくなったのでした。

この時（大正十五年）新らしく来られた先生はフランス人のプリュニエ教授（Prunier）と東大出の後藤末雄教授でした。

プリュニエ教授はリヨン大学出身で、この時始めて日本に来られたと聞いていました。私は一年経たずに卒業してしまったので、ほんの少し接触し得ただけでした。同教授は悪い時に日本に来られたもので、戦争末期にフランス大使館員等と共に軽井沢の収容所に幽閉されたと聞きましたが、その後の消息は残念ながら聞き洩しています。

後藤末雄教授は語学専門と云うことで、以前から教えていられた廣瀬哲士教授とは別に扱はれて、ラシース、モリエールなどの古典劇も専門に読まれましたが仲々きびしい先生で、吾々と一緒の蔵原伸二郎君が、最高学生になった時にロシヤ語に取りつかれて、外語のロシヤ語の夜学に通い出した時に、先生は大変に腹を立て、「私の講義を休んで他の講義を聞く様な学生は卒業させない」と云ひ出して、蔵原君の釈明には耳を貸さず、遂に落第させて、卒業生名簿から名前を削ってしまったのには、ひどすぎる扱いとして吾々学生を憤慨させたものです。蔵原君はよき詩人として未だにその名が残っていますが

慶応仏文科出身と云われていないのは残念です。

ところで、一九世紀末からの西欧の言語学の発展は慶応の仏文科にどの様に這入って来たでしょうか。仏文科自身についてだけ云えば全くゼロだったと云えるでしょう。私の在学中ソシュールの名も聞いた事はありませんでした。英文科では言語学の時間に Verner の法則の解説をする先生がありましたが、これはむしろ英語学の細い所に這入るので、仏文の者は余り聞きに行きませんでした。しかしこの時大変幸だった事は、西脇順三郎先生がヨーロッパの留学から帰朝されて、新しく言語学の講義を開始された事でした。私は既に卒業していて、講義に出席する事は出来ませんでしたが、二年下の高松義雄君のノートを借りてあとで読み、ソシュールやジュネーヴ学派の事蹟などを知り大変為になった事を覚えています。尚西脇先生は現在詩人の面のみが強調されていますが、実はすぐれた英語学者でその面が忘れられている様に見えるのは残念に思います。

さて、言語学のことは別にして、仏文科が伸びて行ったのは、やはり佐藤朔塾長、白井浩司学科長の力によるものですが、その外にどう云う方々のお名前を挙げなければならないかと云えば、名を得た人として、次のリストが出来ました（数字は卒業年）井汲清治（大正六）、横部得三郎（大正十三）、青柳瑞穂（大正十五）、高橋廣江（同）、斎藤吉彦（昭二）、高松 義雄（昭四）、吉川 静雄（同）、佐藤朔（昭五）、田中千禾夫（同）、蘆原英了（昭六）、北原由三郎（同）、大久保洋海（同）、佐野一男（昭七）、増田良二（昭七）、木内林太郎（昭八）、犬丸幹雄（昭九）、二宮孝顕（昭九）、丸岡 明（同）、白井浩司（昭十六）、芥川比呂志（昭十七）、堀田善衛（同）、朝吹三吉等

（元白百合女子大学教授）

何とも爽やかな白井浩司さん

大久保 洋 海

初めての出合いは、白井さんがまだ仏文の学生で、私が「銀座でふらんす語」などと、西銀座の一角に教室を